千貫おいし

【ナレーション】

岩手県金ケ崎町のはるか北西にある千貫石溜池(せんがんいしためいけ)は、土で作られたダムで、その中でも全国的に知られる、当時としては、大規模なものです。

この溜池の水が、金ケ崎地方の田んぼや畑を広く潤し、豊かな作物を育てているのです。

このお話は千貫石溜池にまつわる悲しい人柱の物語です。

千貫おいし

【村人Ａ】
「今年（こどす）もまだ雨降らねなあ、水さえあれば、この辺（あだり）の土地（とず）は立派な田んぼになるんだがなあ。」

【村人Ｂ】
「ろくさま米のとれねー田んぼを耕すのはもうやんたじゃ。」

【ナレーション】
農民たちは先祖代々、乾いて荒れた土地を見つめながら嘆いていました。
この地方は何百年にも渡って、水不足に悩まされてきたのです。

千貫おいし

【ナレーション】
江戸時代になって、長い間の願いがかない、堤防の工事が始まりました。
工事を担当したのは仙台から来た川田勘裕（かわだかんすけ）という人でした。

【勘裕】
「川の上流に溜池を作る工事をする。
米のとれる田んぼを作る為だ。
皆しっかりと頑張るのだぞ。」

千貫おいし

【ナレーション】
しかし、工事は始めから順調にはいきませんでした。
雨が降り続いて、川の水が増えると、工事途中の堤防が壊れて流されてしまうのです。

【村人Ｂ】
「土手っこ切れたぞー」

千貫おいし

【ナレーション】

叫びを聞いた村人達は、暗闇の中でも鍬(くわ)やもっこを担いで駆けつけました。

激しい川の流れに首までつかり、冷たさに耐えながら命がけで杭を打ち、石を投げ込みました。

たくさんの労力とたくさんの資金を使って、途中まで作った堤(つつみ)が雨で駄目になっても、人々は気を取り直して工事をやり直しました。

また次の年も流され、さらに3年目には、ものすごい洪水となって家まで流されるほどだったのです。

千貫おいし

【ナレーション】
この3年続きの災難に村人達は、堤を作る意欲がすっかり無くなってしまいました。
工事の責任者の川田勘助も困り果て、村の人々に言いました。

【勘裕】
「これ以上工事を遅らせるわけにはいかんのだ。
どんな方法でもいい。
何かいい手は無いか。」

千貫おいし

【ナレーション】
そんな時、どこからともなく村に噂が流れ広まったのです。

【村人Ｂ】
「こんなに災難が続くのは、川の主様の怒(いが)りに触れてしまったんだべ。」

【村人Ａ】
「うんだ、川の主様の怒りだべ。」

【村人Ｂ】
「生け贄(にえ)に娘子を人柱(ひとばすら)に立てるしか、災いを逃れる方法はねえべな。」

【村人Ａ】
「うんだ。人柱だ。」

【ナレーション】
人柱というのは、川や溜池の工事の災いを防ぐために、人間を生きたまま埋める風習です。

千貫おいし

【ナレーション】
村はどの娘を人柱にするかで、険悪な様子になりました。

【村人Ｂ】
「誰が人柱になるのじゃ。」

【村人Ａ】
「おらいの所（どこ）は一人娘だがら出す訳にはいがねじゃ。」

【村人Ｂ】
「おらいの娘は、じき嫁っこさ行ぐがらわがねじゃ。」

【ナレーション】
村人の誰もが、自分の娘を人柱に出すのを嫌がりました。

そこで村中から千貫文（せんかんもん）のお金を集めて、何人かの村人が、よその村に人柱のための娘を買いに出ました。

千貫おいし

【ナレーション】
釜石というところからお石という一九歳の娘を銭千貫文で買ってきました。
お石は奉公（ほうこう）に出るのだと言われて連れてこられたのでした。

【村人Ａ】
「いいか、お石。おめえはこれから川の主様のどこさ奉公さ出るのじゃ。」

【お石】
「川の主様って誰だ。」

【村人Ａ】
「とても偉（えれ）人だ。」

【お石】
「奉公って何だ。」

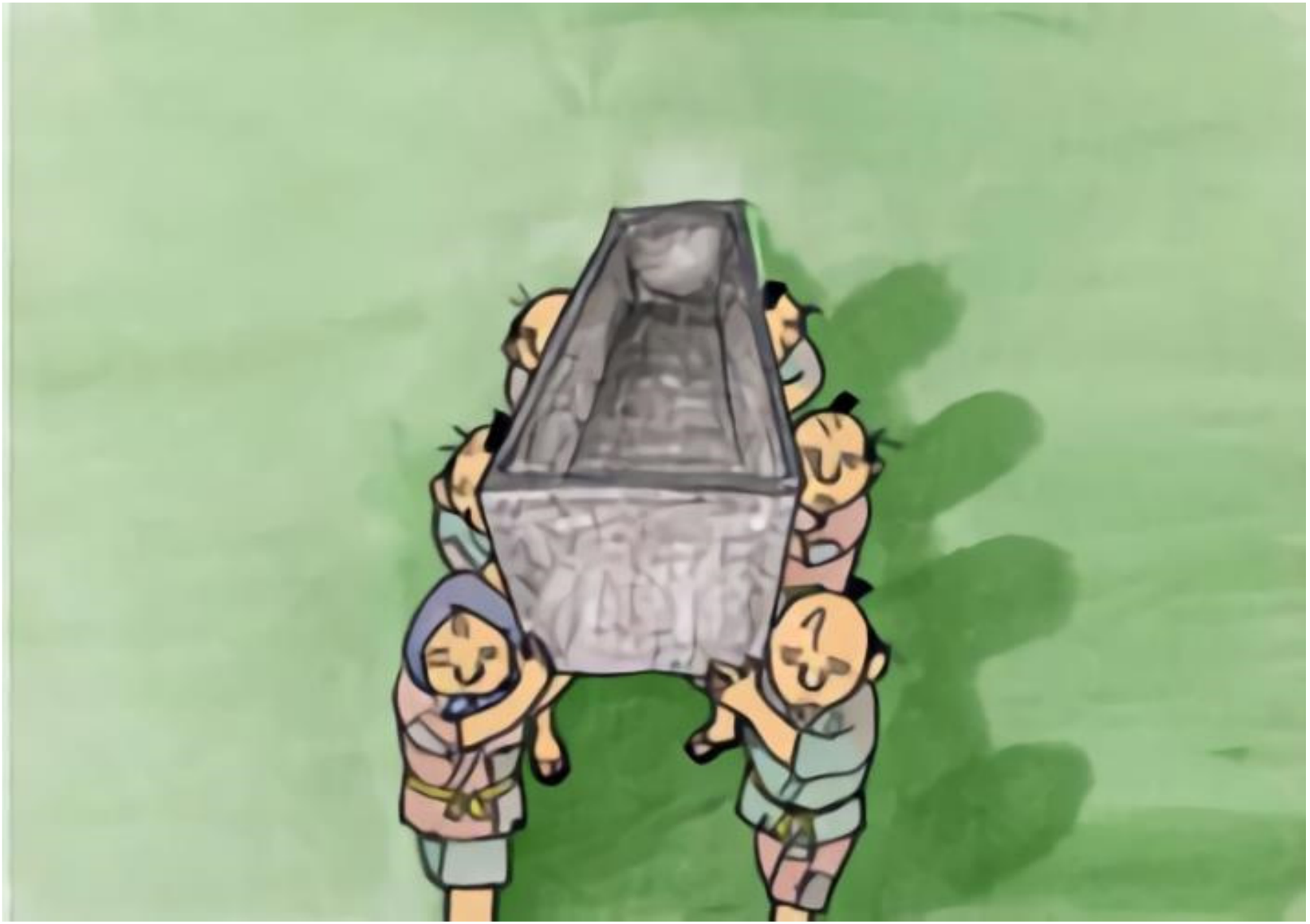
【村人Ａ】
「身の回りの世話すんのさ。」

【お石】
「何年行ぐのや。」

【村人Ａ】
「百年だ。」

【お石】
「百年！・・・ずいぶん長（なげ）な。

千貫おいし



【ナレーション】
村人達は大きな石の櫃を作り、その中に小さな仏壇(ぶつだん)を飾り、しっかりと拝みました。

【お石】
「**この石の箱はなん何だ。**」

【村人Ａ】
「**お前(め)が、主様の所に行ぐ櫃(ひつぎ)だ。**」

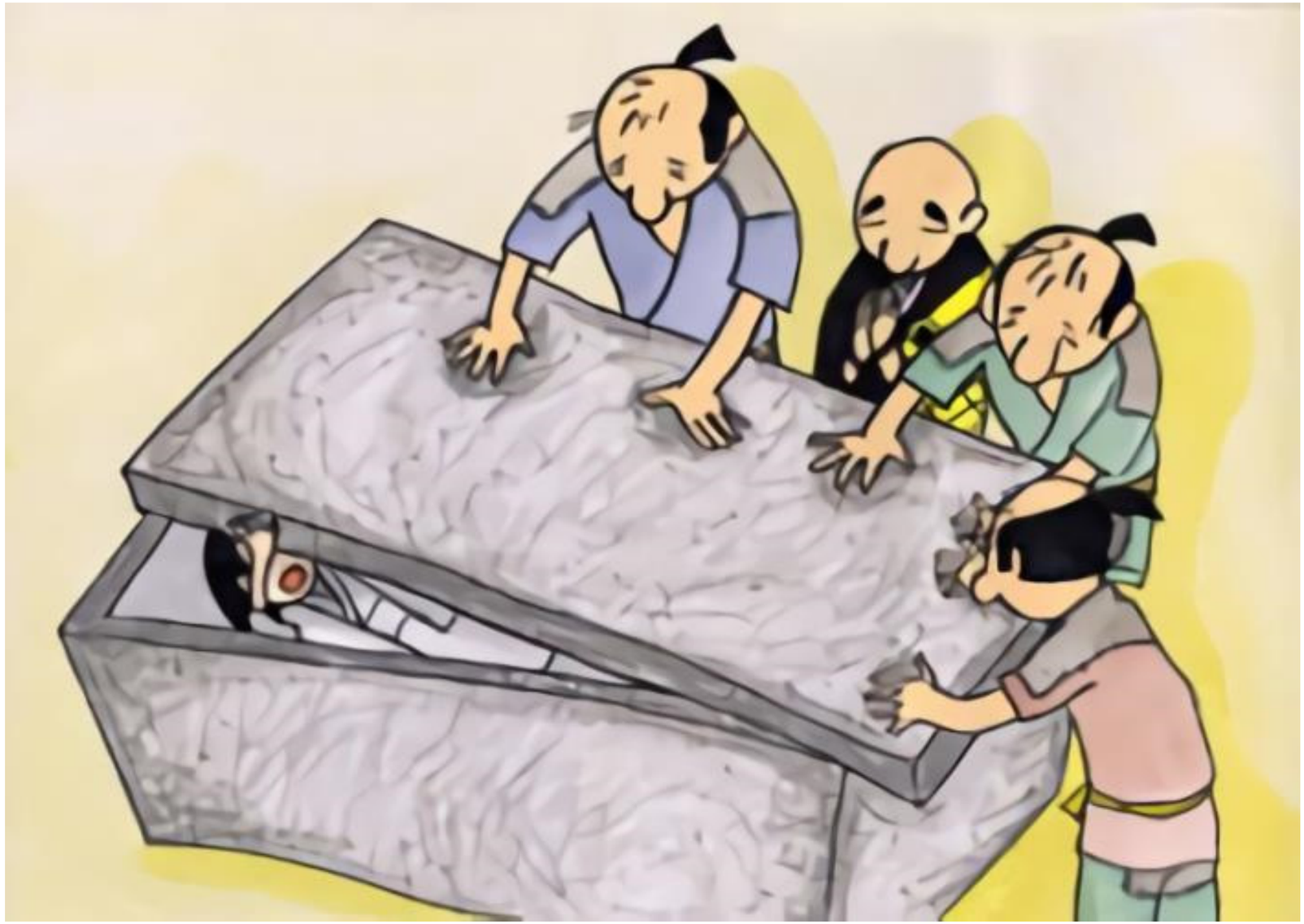
【お石】
「**おれは仏壇と一緒に入るのは、やんだ。**」

【村人Ａ】
「**こいづはな、お石。お前の為に飾った仏壇だ。**」

【お石】
「**おれは、そんなのさ入りたくねえ**」

【村人Ａ】
「**うるせ、入(へ)れったら、入れ。**」

千貫おいし



【お石】
「わあー、やめでけろ。」

【村人Ａ】
「わがね、入えれ。」

【お石】
「おらこんなのやんた。
たのむ、出してけろ。」

【村人Ａ】
「だまれ。
百年経ったら、帰(け)ってくんだから。
おとなすく入れ。」

【ナレーション】
嫌がるお石を、無理矢理櫃の中に押し込んで、ふたをしてしまいました。

千貫おいし

【ナレーション】
お石の入った石の櫃は、工事現場の川底深くに沈められました。

この時、冥土（めいど）へのみやげとして赤牛１頭を一緒に沈めました。

【村人Ａ】
「お石にはむげ事をしたが、こんで川の主様も鎮まってくれるべじゃ。」

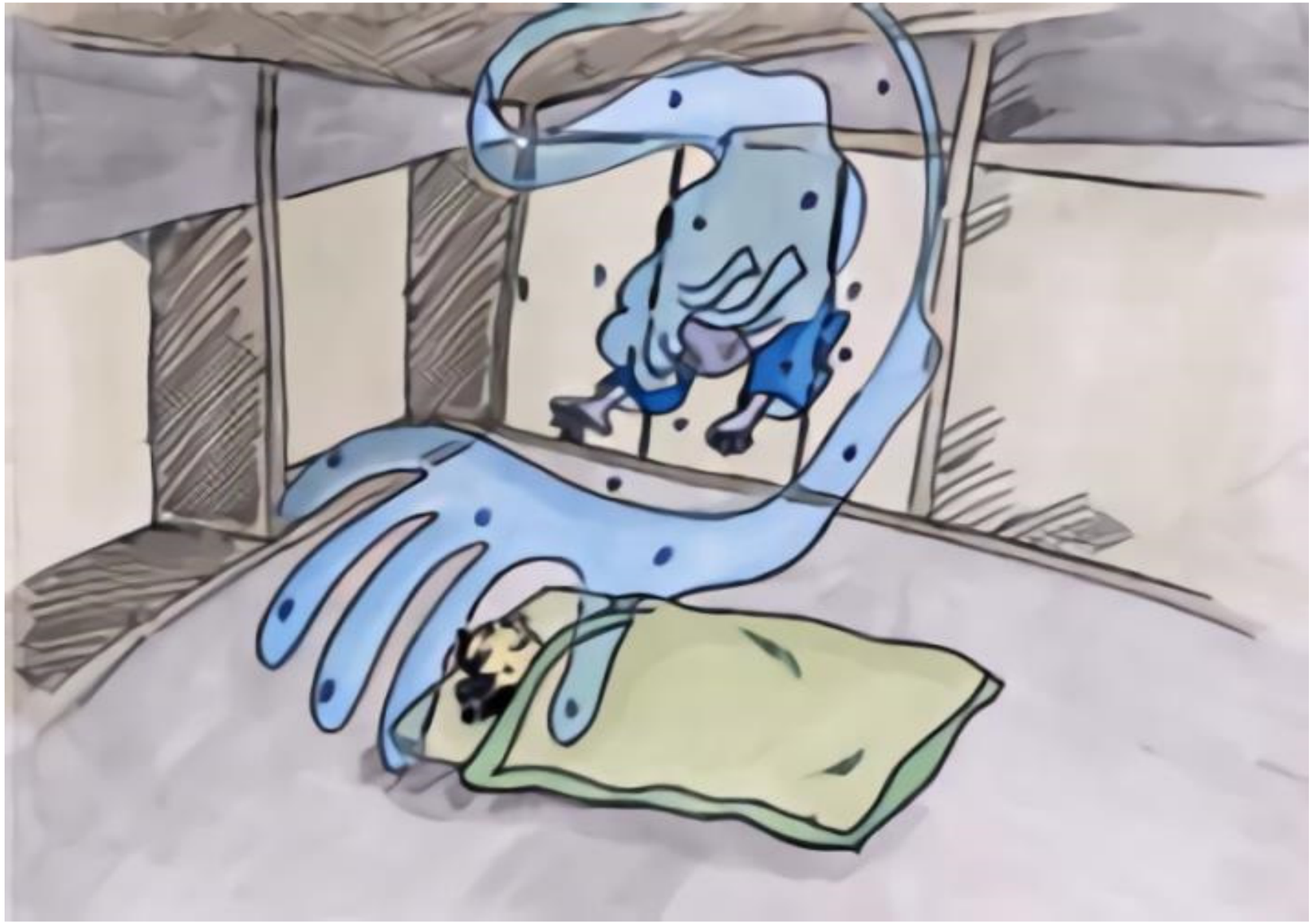
【ナレーション】
村人達は複雑な気持ちで拝みました。

しかしそれでも工事は順調には行きませんでした。

工事は予定よりだいぶ遅れて、完成するのにさらに7年もかかってしまったのです。

この溜池は千貫文で買われてきたお石を、人柱にしたことから千貫石と呼ばれました。

千貫おいし

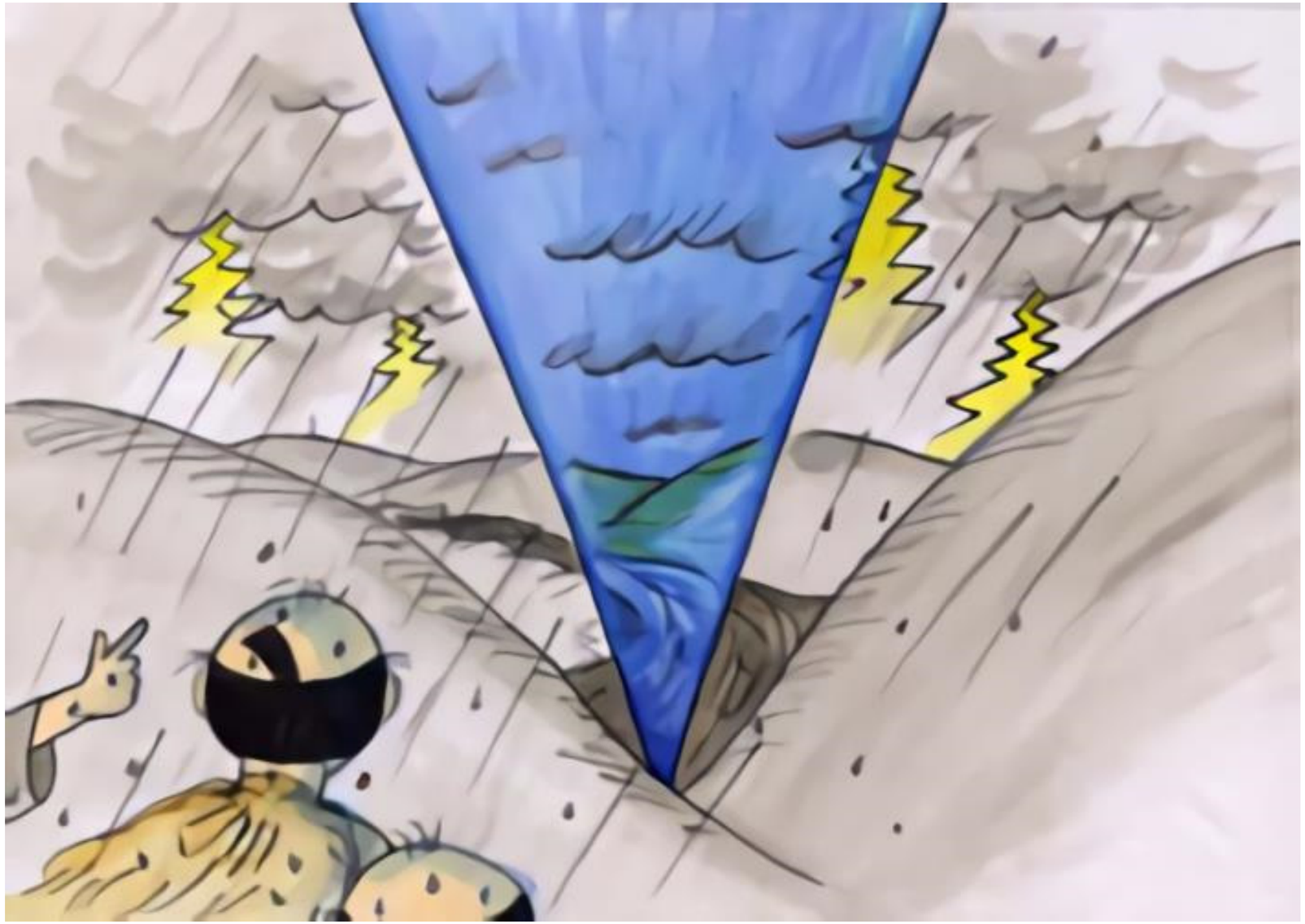


【ナレーション】
千貫石溜池の完成が遅れた責任をとって、川田勘助は奉行（ぶぎょう）をやめ、仙台に帰りました。
勘助は毎晩のように

【お石】
「暗（くれ）ーぞ、暗ーぞ。」

【ナレーション】
というお石の声に悩まされました。
やがて勘助は狂って病気になり、死んでしまいました。
勘助の一族も病気にかかったりして、次々と死んで一族は絶えてしまったのです。

千貫おいし



【ナレーション】
溜池が完成して、百年も経とうとしたある年の春のことです。

大雨が7日7晩降り続き、川の水があふれ、堰が切れて、津波のような鉄砲水が村を襲いました。

その時です。

【村人Ｃ】
「あ、あいづ。何だ、あの青光(あおびが)りすんのは。」

【村人Ｄ】
「溜池の所(とっ)から出でるぞ。」

【ナレーション】
溜池の堰が壊れると共に、青い光の柱が立ち上がり、天まで達したのです。

お石と赤牛の怨霊(おんりょう)に違いないと、村中が大騒ぎになりました。

千貫おいし

【ナレーション】

昭和になってからも、村人達はお石の怨霊に悩まされました。

そこで、溜池の高台に、お石と赤牛を供養するための観音様をまつり、心を込めて供養しました。

それ以来、お石のたたりはなくなったのです。

今では、この溜池のおかげで広大な田畑が潤い、たくさんの作物がとれる様になりました。

私たち皆が、安心して幸せに暮らしていく為に、もう2度とこのような悲しい出来事を繰り返してはいけないのです。

おしまい